

神奈川県立 生命の星・地球博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

友の会通信

122
2023.12

Vol.27 No.3 通巻122号 2023年12月15日発行(年4回発行)



「丹沢連峰を背景に群れ飛ぶオオミズナギドリ」真鶴港の観光船上より

2023.10.16 飯島俊幸撮影

撮影後、鳥の種名を調べていて、それがオオミズナギドリの群れと分かり、感激でした。数年前に真鶴半島突端の三石海岸から海上遠くにそれらしき鳥影の群れが飛翔しているのを双眼鏡で見かけたことがありました。この鳥は、有吉佐和子さんの小説「海暗」に出てくる鳥で、いつかお目にかかりたいと思っていました。

目次

事務部より	2
情報クリップ	2
活動報告	3
行事案内	12

事務局より

2023年度友の会第3回役員会の開催

2023年6月24日（土曜日）午後より、第3回友の会役員会を開催しました。

今年度は神奈川県は知事選挙があったため、定期異動が6月となり、博物館の友の会担当の企画普及課長が佐藤さんから山下さんに異動となり、ご挨拶がありました。

企画部からは今年度後半行事の確認と講座担当者会議の日程の確認、また再開するサロン・ド・小田原について内容の確認がありました。

2023年度友の会第4回役員会の開催

2023年9月16日（土曜日）午後より、第4回友の会役員会を開催しました。

会計状況等の報告では、新たに34名の会員が入れ、目標の370名まで、あと少しとなりました。支出については、最近の物価高の影響で印刷費が若干上がったこと、また講座等で使用するためのポータブル台車の購入について報告がありました。

企画部からは、下半期の行事の確認と、来年度の講座の企画募集について、今回チラシを同封できなかったのがブログにて募集すること、また講座担当者会議11月4日（土）にオンラインにて実施する旨、報告がありました。

また、WEBフォームによる講座申込を開始するので、講座担当者はぜひ活用してほしいとの発言がありました。まずは、令和6年1月に開催する「地図を楽しもう！」から対応します。

その他として、ミューズフェスタ2024について、前回と同様な内容で参加することなどが確認されました。

●友の会運営のお手伝いを募集！

友の会では運営のお手伝いをしていただけの方を募集しています。資料の発送や会計事務、友の会通信の企画・作成、ブログ等での情報発信作業など、ご興味のある方はお気軽に事務局までご連絡ください。

（友の会事務局）

TEL:0465-21-1515、E-mail:kpmtomo@ybb.ne.jp

情報クリップ

2023年度 友の会会員数:367名(10月31日現在)
正会員:364名/賛助会員:3名

●「2023年度 子ども自然科学作品展」のお知らせ



開催期間:2023年12月16日(土)～
2024年1月8日(月・祝)

夏休みの自由研究や日頃から行っている調査研究の成果など、自然科学に関する小・中学生の研究作品を展示します。毎年、数多くの力作が寄せられ、作品の一つひとつに当館の学芸員のコメントが付けられます。他の児童・生徒の皆さんの研究の参考にもなります。

●博物館からのお知らせ

最新の情報は、博物館ウェブサイトや公式 X (旧 Twitter) でお知らせしますので、ご来館の際は必ず事前にご確認ください。

問合せ先:神奈川県立 生命の星・地球博物館
企画普及課 TEL:0465-21-1515
FAX:0465-23-8846

- ・ウェブサイト: <https://nh.kanagawa-museum.jp/>
- ・公式 X: @seimeinohoshiPR
- ・混雑情報 X: @seimeinohoshiCI

活動報告（地学グループ）

◆地学 G 地話懇話会

「伊豆衝突帯のテクトニクス:関東地震

・小田原地震・北伊豆地震との関係」

2023年8月23日（水）／博物館講義室／33名／
本多 亮氏（神奈川県温泉地学研究所）

講演される本多亮氏

今回の講師の本多亮氏は、温泉研究所の研究課の主任研究員で、地震発生のメカニズムをはじめ、地震学の専門家として、多くの研究をされています。今年、関東地震100年にあたり、講演の講師として引っ張りだこの忙しい状況の中、本懇話会にて講話をしていただきました。

近年、東海地震、南海地震、そして小田原周辺地域を震源とする巨大地震発生の可能性への警鐘と、その防災・減災対策の必要性が国や地域で検討されています。そのような中、今回の演題は「伊豆衝突帯のテクトニクス：関東地震・小田原地震・北伊豆地震との関係」という非常に興味深いテーマということもあり、関心の高い参加者が多かったようです。事前にその情報を受けた本多先生は、たくさんの図版資料を使って、かなり専門的な話をされました。

講話の中心となったのは、1985年・1988年に石橋克彦（神戸大学名誉教授）氏が提唱した小田原地震（神奈川県西部地震）の周期が約73年周期で起きているという説の検証です。私自身、この73年周期説に対し不安と関心を持ち、かなり意識して今日まで生きてきました。しかし、関東地震発生から100年が経つ今日まで、マグニチュード7を超える地震はおきていません。このことを、本多先生は、江戸時代以降400年を超えて小田原地域に発生した

マグニチュード7以上の5回の地震について、1633年に発生した地震から大正関東地震までの発生のメカニズムと震源域について丁寧に説明されました。実際に、5回のうち2回は1703年の元禄と1923年の大正の2つの関東地震によるもので、残りの3回は1633年、1782年、1853年の小田原地震です。特に小田原地震の発生を想定されるテクトニクスに関しては「西相模湾断裂」「伊豆マイクロプレート」「二重沈み込み説」等、諸説ある中、最新の情報と分析から、これら5つの地震の震源や発生メカニズムが必ずしも同じではないことも教えていただきました。

また、小田原地震の発生メカニズムの研究は、関東地震との関係だけでなく、伊豆東部単成火山群など周辺火山活動とも関連付けながら進められてきたとのことでした。

73年周期説によれば、大正関東地震以降の小田原地震の発生は、1998年の予想でしたが未だ起きてはいません。しかし、世界的にも稀な3つのプレートの合流地点でもあり、地質学的に見ても大きな地震が度重なり発生する場所にある小田原地域ですから、いつでも地震発生に対する準備と心構えを忘れてはいけないことを強く訴えられていました。

最後の質疑応答では、会場からは多くの質問がありました。本多先生には丁寧な回答をいただきました。（野田啓司）



講演中の会場の様子



講演後の質疑応答の時間

活動報告（サロン・ド・小田原）

第138回サロン・ド・小田原「市民科学が支える菌類研究『新・入生田菌類誌』完成までの歩み」

2023年9月9日（土）／博物館東講義室／21名／講師：折原貴道学芸員



今回の話題提供者 折原貴道学芸員

2020, 2021, 2022の三年は、まだ過ぎていないように感じるのに、今は2023年。新型コロナウイルスによって失った残念な、勿体ない月日でした。コロナ禍は人類が体験したウイルスによる世界同時の試練で、歴史として習っていた過去の被害を、現代人が身をもって追体験し、ウイルスに対する認識を一挙に塗り替えた出来事でもありました。

その三年の代償の末、コロナウイルス感染が通常の感染症と認定され、「サロン・ド・小田原」が復活しました。この会は、コロナ禍以前は年間3~4回ほど開催され毎回、時の話題を反映する自然科学のお話を学芸員さんが話題提供し、飲食を伴う懇談の場として機能していた博物館と友の会の名物催しです。

復活第一回目の話題提供者は折原学芸員でした。開催中の特別展「かながわご当地菌類」の紹介を兼ねていました。微生物の代表格・菌類のお話かと思いましたが、話題の内容は標題のごとく「市民科学が支える菌類研究」でした。

市民科学とは、「自然界の謎解きに協力できる人材」と言い換えることもできるでしょう。以前から市民の科学的思考を育てることは、強く要請されていましたが、今回の話題はその一つの成果を示す例として、取り上げられていました。

折原さんによると、入生田では20年を超す毎月の調査が行われており、10,500点以上の標本が取

蔵されていること、その成果が、2011年に『入生田菌類誌第一巻』として、また本年2月に『新・入生田菌類誌』として発刊されたことが紹介され、それを成し遂げたのが、一般市民のマンパワーであったと強調されました。

「特筆すべきは各種掲載の観察・記載から図の作成、編集までを一般市民の手で作られた地域自然誌であり、学術的利用価値を有する資料である。」と本の前書きで述べておられます。市民力を評価して頂けて嬉しく思いました。

専門家だけでも、市民だけでもできない仕事の完成例は、神奈川県では博物館を中核にして、植物の分野でもすでに3度達成されています。他の分野でも同様の成果は上がっている事でしょう。この博物館にすでにあった伝統の上に、菌類分野の資料集が加わりました。市民力を育てれば、博物館はその役割を大きく広げて果たすことが出来ます。

生涯教育の場である博物館は、個人の趣味を深める役目を果たすと同時に、自然科学の解明に役立つ人材を育てていることになります。価値ある一石二鳥です。

資料（標本）の保存だけではなく、市民に自然探求の面白さを伝え、探求力を育て、人生に味わいをもたらす重要な機関です。その意味で生命の星・地球博物館が神奈川県民一人ひとりに“My Museum”として愛され、ますます頼りにされる存在になってほしいと願います。市民と博物館を繋ぐ役目の「友の会」も、同じ目的に向かって活動をしないとなりません。サロン・ド・小田原の再開に当たって、博物館と市民が手を組んで、科学的思考の出来る市民の輪を広げられるよう、これからもその一助になりたいと思った次第です。（赤堀千里）



特別展示室にて折原さんの解説を聞く

活動報告（よろずスタジオ）

◆「そこにも！ここにも！菌類が」

2023年9月10日（日）／博物館東講義室／49人
（大人24人、子ども25人）／協力：折原学芸員／
スタッフ：9人

地域の人たちが関わってできた菌類誌の本がある！と聞いて即購入。それが「新・入生田菌類誌」でした。菌類好きの人たちの地道に観察・記録したものが博物館の学芸員や専門の先生方のご指導とご協力により一つの本に、素晴らしい！と思いました。本文にはそれぞれの種について採集日と場所、採集者の名前まで記載され、また説明文の執筆者も種によって様々、丁寧に作られ、そしてなんと全ての種は標本と紐付いている！すごいと思いました。関わった方々の菌類への並々ならぬ思いを感じました。

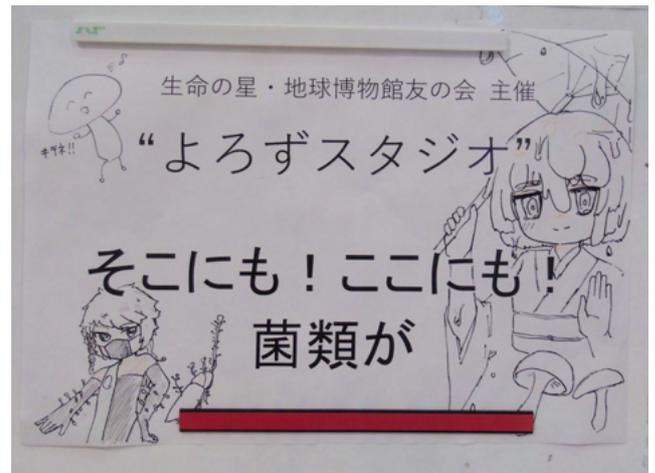
「菌類誌」購入時のご縁で、博物館友の会菌事勉強会の赤堀千里さんとメールでお近づきになり「菌類展もやっているし、菌類のワークショップもあるので来ませんか？」とお誘い頂き先日9/10(日)に博物館に伺いました。まず「ご当地菌類展」を興味深く拝見し、綺麗な標本にびっくり、かつてシリカゲルで乾燥させても直ぐに湿気でカビが生え散々だったのが今はフリーズドライ？時代を感じました。また展示には在野で菌類の研究をされていた先人の方々のご紹介もあり、昔から今に続く流れを思いました。

そしてこのたび、何にも増して菌類の多様性について目を開かせられた気がしています。展示でも様々な菌の紹介がありましたが、「菌類誌」を見た時もキノコだけでなく、不完全菌や、植病菌、地衣類、粘菌など、拡大しないと見えない世界にまで、菌類全体に目を向けて広範囲に採集し観察・記録する、その視点がとても新鮮に感じました！「菌類誌」の中のコラムの記述には菌の生活を辿って観察し探求する皆さんの姿勢がよくあらわれていますが、一つ一つの小さな発見が自然界の中での大きな菌類の営みに繋がっている気がして、とても貴重で大切なことだと思いました。そしてかつ大変に興味深い！

ワークショップでは菌類の簡単な説明の後に展示されたキノコを手にとって見ることができました。近所で取ってきたという、なんと立派なおオシロカラカサタケ！そして美しいシロツルタケ？かつてキ

ノコを探していた頃の林の中の落ち葉の匂いなどが蘇り、ちょっとドキドキ、はるばる箱根の博物館まで来たかがありました！やはり生のものに触れることには力があります。博物館のある入生田地域は川が流れ山林が主とのこと。自然が豊かなこの場所です。ずっとこの観察会の活動が続いていきますように！そしてあと20年も30年もたった時に、どんな風に菌類の世界が変化しているか？川が汚れず、木々が元気でいて、変わらず豊かな菌類の種がいてその営みが見られますように！願っています。

ワークショップの後には思いがけず折原学芸員とボランティアグループの方々とお話しさせて頂く機会をいただき大変貴重なひと時となりました。博物館には何十年も行ったことがなくあまり身近ではなかったのですが、まさに「生命の星・地球」について多くのことを紹介し、色々なことを働きかけ、そして地球やその生き物たちに思いを寄せる多くの人が一緒に考えたり学んだりできる場所なんだと実感しました。楽しく学んだ博物館での一日に感謝、有り難うございました！（浅野真知子）



看板「そこにも！ここにも！」



キノコの部品を説明

活動報告（植物グループ）

◆植物観察会「黒崎の鼻へ海岸植物を訪ねて」
2023年9月16日（土）三浦市初声町黒崎／スタッフ含めて11名／講師：田中徳久館長／担当：植物グループ

黒崎の鼻は以前より気になっていたのですが、機会がなく、今回便乗させていただき訪れることができました。

秋とは思えない暑さの中、宮田バス停から道路わきに咲くアレチハナガサ、メマツヨイグサ、クズを見ながら海岸に向かいました。途中の林には、ママコノシリヌグイ、センニンソウの花がそこそこに。海岸に出るとラセイタソウ、大きな実のついたイガオナモミ、オカヒジキ、ツルナ。試しにオカヒジキとツルナの葉茎をかじってみたところ若干の塩味がしました。



ソナレムグラ

昼食を摂った尾根は風があり、ヨットが帆走する相模湾を見ながら一息つくことができました。残念ながら富士山は見えませんでした。コマツナギの半畳ほどの群生がありましたが、背が低く、数十cmと思い込んでいた者には教えられなければわかりませんでした。センニンソウは葉が小さめで厚く、環境が異なるとこうも違うものかと驚きました。

そこそこに咲くハマシャジンやハマサワヒヨドリを楽しみながらも、風のない林を抜けてホッと、予定の14時より早くバス停に着くことができました。

薄曇りで風がほとんどなく、観察中に集中力が途切れそうになる蒸し暑い日でしたが、普段見る機会が少ない海岸植物や、よく目にするが様子が異なる植物を見、植物の環境適応力を目の当たりにすることができました。ありがとうございました。

黒崎の鼻は、小春日和の日に行っておぼろにするのにもよさそうなところでした。（妙泉正隆）



ハマエノコロ

ワダン（花）、ボタンボウフウ（花）、イソギク、ハマゴウ（花）、ハマエノコロ、ハマゼリ（花）、ハチジョウナ（花）、アイアシ、イヨカズラ（大きな実）、ヒロハノカワラサイコ、ソナレムグラ（花）、ヤリテンツキ、ネコハギ（花）、ハマシャジン（花）、ハマオモト（花・一株のみ）、ヒロハクサフジ（花）、・・・多くが初見でした。

何か所かで田中先生やスタッフによる解説を伺いました。ワダンの仲間の分布の様子、ヤリテンツキの小穂の構造や県内ではここでしか見られないこと、ハチジョウナの名の不思議、ソナレムグラの托葉など。



観察会風景

◆植物観察会「身近な植物観察入門」

2023年9月23日(土)／博物館周辺／
スタッフ含めて13名／担当：植物グループ

今日は予報と違って朝から雨降り、急遽博物館の外周コースを歩くことにしました。

まずは植木やフェンスに絡みついて咲くヘクソカズラとコヒルガオの花、足元にはコミカンソウやコニシキソウがしっかりと若い果実を付けていました。

コニシキソウの仲間は茎をちぎると白い液を出すのが特徴で、その後オオニシキソウもたくさん出てきました(トウダイグサ科)。

同じような場所に傷つけても白い液を出さないコミカンソウ、ヒメカンソウが出てきました(コミカンソウ科)。ヒメカンソウは主茎にも葉や果実があるのがコミカンソウと違う所ですが、長く伸びて斜上した茎にはたくさんの果実がついていました。



ヒメカンソウ

またこの時期、遠くからも黒紫色の葯や柱頭が目立つシマスズメノヒエがそこかしこで見られますがここにも沢山生えていました。小穂の毛の有無を確かめたり、ルーペで雌しべの柱頭と葯を観察。葯はすでに開いてしまっているようでした。同じイネ科スズメノヒエ属のアメリカスズメノヒエ、タチスズメノヒエ、スズメノヒエも出ました。在来種のスズメノヒエは小穂が無毛なのが良い識別点ですね。

その後カヤツリグサ(カヤツリグサ科カヤツリグサ属)が出てくると、続けて同属のイヌクグ、メリケンガヤツリ、ハマスゲが目に入ってきました。最後に草丈の高いカヤツリグサ科に??となりましたがヌマガヤツリに落ち着きました。



ヌマガヤツリに到着

観察会の中盤頃からは雨も止み、クズやアレチヌスビトハギ、ヤハズソウ、メドハギ、ツルマメ等のマメ科の花が初秋を感じさせてくれました。



迷惑な引っ付き虫アレチヌスビトハギ

そして、早川左岸土手上的遊歩道の一角のススキが刈り取られているところに何と今日のご褒美「ナンバンギセル」が出ているではありませんか。しばし皆さんそれぞれに写真撮影となりました。この場所は毎年ナンバンギセルが出るのでしょうか。それでちょこっとだけススキが刈り取られてナンバンギセルに気づかせてくれる粋な計らいと感じました。



今日のご褒美ナンバンギセル

今日は博物館南側敷地と早川左岸土手上的遊歩道、往復で500メートル位を2時間かけて観察しました。身近な場所でたったこの位の狭い所にもこんなにたくさんの自然があり植物が生い茂っている。正に「身近な植物観察入門」になりました。

(植物グループ 浅川久子)

◆植物観察会「里山の秋植物」

2023年10月13日(金)／横浜市栄区上郷町／
スタッフ含めて11名／講師：田中徳久館長／
担当：植物グループ

横浜自然観察の森・自然観察センターの前に10時に集合した。資料が配られ、早速、田中学芸員(県立生命の星・地球博物館館長)による雑木林の植生単位の話があった。横浜市内でも、北部の多摩丘陵では、クヌギコナラ群集にまとめられるが、南部では、オニシバリコナラ群集にまとめられるという。

ヘイケボタルの湿地へ向かって歩き始めたら、葉を出しかけたものヤツボミをつけたオニシバリが、林縁にあちらこ

ちらで見られた。厳密に判定するには手順を踏む必要があるそうだが、オニシバリコナラ群集とはこのことをいうのか、なるほどと得心した。



オニシバリ

シュウブソウが花盛り、ところどころにヤブタバコが点在し、イヌタデの赤い花、薄いピンク色のハナタデに、暑いとはいえ秋の気配を感じる。

同じ道を引き返し、芝地に入ると、ピンク色の花をつけた多数のコシオガマに出会う。以前はゴマノハグサ科に入れられていたが、APGの新しい分類

では、ハマウツボ科に編入された半寄生植物である。植物体全体に腺毛が生えていて、触るとベトつく。



コシオガマ

朝、集合した自然観察センタ

ーの前で、昼食となり、午後はピクニック広場へネナシカズラを見に行く。驚いた。昼何枚分あるだろうか、一面のクズやススキ原にネナシカズラが覆いかぶさっている。襲っているという感じ。色んな植物に寄生するようで、特にこの植物というのはなさそうである。短日植物で、葉がないのにどこがセンサーになっているのか不思議だったが、茎がセンサ

ー役をしていると何かの本で読んだことを思い出した。こんな群落になっているのは、初めて見た。

ヤブマメもいたるところに咲いており、白色の混じった淡紫色の花が満開となっていた。ヤブマメには、開放花からできる果実と、地上でできる閉鎖



ネナシカズラ

花、葉腋から出て地中に潜ってからできる閉鎖花、地中にいきなりできる閉鎖花からできる果実と、4通りで子孫を残す

仕組みを持っていると説明があった。

途中、ナンバンギセルが生えていた。普通、ススキに寄生するが、このナンバンギセルの周りに



ナンバンギセル

は、ススキが生えていない。何に寄生しているか確かめられなかったが、長く地下にのびたススキの根に

寄生しているのであろうと想像する。名前は、南蛮煙管で、姿形が煙管に似ていることからである。

その他、葉の付け根の両側に突起のあるカエデドコロや、スズメウリの実、ツリフネソウ、ガンクビソウ、キンミズヒキなどたくさんの秋草を楽しみ帰路についた。(山田 隆彦)

訂正とお詫び

友の会通信121号(9月号)に間違いがありましたので、下記のように訂正いたします。

4頁「身近な植物観察入門」の4枚目の写真の植物名 誤 ヒナキキョウ

正 ヒナキキョウソウ

心よりお詫びいたします。

(友の会植物グループ)

◆植物観察会「身近な植物観察入門」

2023年10月28日(土)／博物館～吾性沢方面／
スタッフ含めて9名／担当：植物グループ

実をちょっと口に入れたり、ねばねばの果実を触ったりと五感を使っての観察会となりました。

(植物グループ 佐々木あや子)

博物館を出発そうそう正面広場の植え込みの中にマツバランを発見。植え込みの中を覗き込み写真撮影、それから吾性沢方面に向かう。少し上っていくと足元にたくさんのツボクサが小さな果実をつけている。セリ科の植物と聞いて、どなたかにおいをかいでみる、「セリのおいはあまりしないね」とのこと。ここではカニクサの胞子葉の観察もする。ペラペラヨメナも見られ、近所でもあちこちで見られるという声が聞かれる。

樹々の下に入るとさわやかな空気が感じられる。ムクノキはたくさんの濃紺色の果実をつけている。

咲き残りのオカダイコンが果実をつけていたのでさっそく触っていただく。ねばねばの瘦果が手についてくる。すごい粘着力！オカダイコンの近くには鈍い青色のヤブミョウガの果実がいっぱい見られる。1つの果実の中にどんな種子がいくつくらい入っているのだろうかと問いかける。「丸い種が5個ぐらい？」そこでみんなで果実をつぶす。意外にも水気のないカサカサした皮が粉々になっていく。出てきた種子を数えると20くらい数えられた人もいる。そして種子の形もしっかり観察。レモンエゴマもたくさんあり、葉のおいをかいでみる、それぞれにレモンエゴマのおいを満喫。

林道沿いの樹々には鈴なりに実をつけたスズメウリ。これも熟した果実の中を観察、つやのある黒い種子がきれいに並んでいる。ウリの仲間だというのでちょっと味わった参加者は「ちょっと甘い」と。満開のホトトギスが目に飛び込み参加者を楽しませてくれる。

シュウカイドウの花も見つかる。すでに果実もできている。シュウカイドウは雌花と雄花があるので、違いを見比べる。雌花の基部についた3枚のプロペラのようなものは果実の部分。みな不思議そうな顔で果実を触っている、すでに茶色味を帯びた果実も見られ、ここでも果実の中を予想してみる、プロペラのような果実は3つに分かれそうだというので、種子は3個という声が上がってきた。そこでちょっと分解、すると中から出てきたのは小さな粒粒、え、これが種子！との声。シュウカイドウにはムカゴもできるので今度はムカゴ探し。一枝にたくさんのムカゴが見つかる。

10月のまさに秋晴れ、観察路ではいろいろな植物に出会うことができ、葉のおいをかいだり、果



博物館の正面広場で早速観察



スズメウリの黒い種子



シュウカイドウのむかご



石垣に垂れ下がって咲くホトトギス

活動報告（里山むしてくクラブ）

◆昆虫観察会「身近な植物観察会入門」
2023年9月12日（火）／箱根ビジターセンター／
講師：渡辺恭平学芸員／6名（スタッフを含む）／
里山むしてくクラブ

暑い下界を離れて箱根での観察会。そろそろ秋の気配が感じられる観察日和を期待して集まりました。キャンセルが数人出たため少人数のこじんまりした集まりで、中身の濃い観察会になりました。

ビジターセンター内の花の広場は草刈りが済んでいて芝生のようなです。早速エンマコオロギがお出迎え。丈の低い草の間を走り回る姿が沢山ありました

ミルビンに入れた昆虫が回ってきます。レンズが付いていますから真上から見ると小さなハチも大きく色もはっきり見えます。クサキリのおなかを触ってみました。思ったよりもすべすべして手触りは良いものでした。昆虫というざらざらした感じと思いついて入っていましたのでこれは驚きでした。

キンミズヒキの茎にアオイトトンボが止まっています。細い体のブルーが光ってとても綺麗なトンボです。観察会では割合よく見るトンボですが、出会うことはうれしいものです。



アオイトトンボ

叩き網を使いヤマボウシから落ちたのはコブハサミムシです。あまり大きなものではなく、箱根には良くいる種のような感じでした。小さなホソアトキリゴムシ Sp も落ちました。これもヤマボウシにいました。小さいながらオサムシ科と判る体をしています。

マメザクラから落ちたのはジョウカイボンの仲間。ミルビンに入れてもおなかを上にしたまま動きません。死骸かと思っていると動き出し、背中を見せました。するとヒメかニフかかと思っていたのにジョウカイボンではなくカッコウムシの仲間でした。カッコウムシの仲間は久しぶりで懐かしい思いでした。



カッコウムシ Sp

ホウネンタワラチピアメバチの繭がありました。細い糸の先に小さな白い繭が下がっています。どうして糸で吊り下げているのだろうと話しましたが午後の講義で判りました。アリに襲われない為だそうです。アリはこの糸の上を歩けないとの事でした。

午後はセンター内で講師と今日観察した昆虫についての話し合い。顕微鏡でオオヘリカメムシとトガリハナバチを観ました。オオヘリカメムシの背面の淡褐色の軟毛や前胸背板の様子が良く判りました。トガリハナバチの体の毛にも驚きを隠せません。思ったよりも軟らかな毛で全身が覆われていました。

今回観察できたのは66種。秋は春に比べ観察できる昆虫が少ないとは言えまあまあ数だったと思います。（金子直子）



観察会の様子

活動報告（生物間共生講演会XI）

◆「昆虫の大発生を防ぐ菌類と助ける菌類」
2023年11月11日（土）／博物館講義室／35名／
講師：鎌田 直人 氏（東京大学千葉演習林長、教授）／

今回が初めて参加となります。

たいへん興味深い話を聞かせていただきまして、
学び多い一日となりました。参加させていただき、
ありがとうございました。

ブナアオシャチホコの生態

- ・蛹の期間が長い3/4~2/1/年（約9か月から10か月間）を蛹で過ごす。
- ・幼虫の時に食べたもの（葉の量）で卵の数が決まる。
- ・1齢の時は葉の表を食べ、2齢以上になると葉の裏面を食べる。
- ・終齢時には1齢の時に比べて150倍の大きさになる。・・・等

虫によって好みの樹種（葉）が有る。ということは知っていましたが、その葉に対しても、葉の表面のさく状組織を食べる。裏面の海綿状組織は食べられない。といった事や1本の樹に、「おいしい葉っぱ」と「おいしくない葉っぱ」がある。という事に興味を持ちました。

私は造園業の仕事をしているのですが、庭を管理していく中で、虫による大規模食害被害を軽減させるべく、幼虫の発生初期段階で、木を下から見上げて幼虫を見つけ、手で取り除くのですが、（農薬をまかない）その作業時にフッと「幼虫が葉の裏側に居るから見つけやすいなあ。これが、葉の表に幼虫が居たら下からは見えず、木に登って上から見ないと居るかどうか分からないから、取り除くのが今より難しいだろうな。幼虫が（見つけやすい）葉の裏側に居てくれてよかった。」と思った事があります「どうして葉の裏側に居るのかな？」

「どうしてこの葉には居て、隣の葉には居ないのかな？」

と思う事があっても、その後に調べる事もせずにはいましたが、今回、先生のお話を聞いて「なるほど！そういう事か！」と思う事がいくつも在り、（もちろん虫（幼虫）によっては表面の葉につくものもた

くさん居ると思っています。）私の中でなんとなく思っていた事に答えをもらったようなお話しでした。

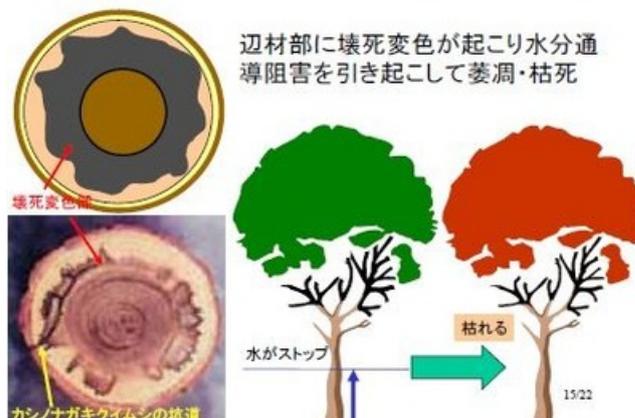
ナラ枯れについてのお話の中でも養菌性昆虫としてのキクイムシの話も面白く聞かせてもらいました。通った穴？かじって空けた穴？の表面に菌を培養し、それを食料としている事、その培養した菌を食べつくすとその表面は黒くなる事。確かに穿孔虫によって枯れてしまった樹木を伐採した時に見た穴は、黒（茶色）になっていました。

なにげなく見過ごしていた（見逃していた）事が案外調べてみると、自分が興味をそそられる内容である、という事に気が付きました。調査や観察していく苦労もたくさんあると思っているのですが、長年見続けていく事がとても大事だという事。私なりに見続けていく努力と「どうしてかな？」と思った事をそのままにせず、「掘り下げて調べてみる」という事をもっと大事にしていこうと思った講座でした。（深澤）



鎌田直人先生

ナラ枯れのメカニズム



行事案内

◆ よろずスタジオ

対 象：どなたでも

申込み：不要／オープン

参加費：無料

場 所：博物館1階 東側講義室

「砂とあそぼう」

砂は、どんな色やかたちをしているかな？どんな性質があるのかな？

砂を使って、遊びながら考えてみましょう。

日 時：2024年1月14日（日） 13:00～15:00



2014年のよろずスタジオ「砂と遊ぼう」

ようがん ふんか 「溶岩の噴火」

溶岩（ようがん）はどうして地上に出てくるのでしょうか？噴火の様子を、お酢と重曹で模擬実験して観察します。古くから親しまれている実験です。

日 時：2024年2月18日（日） 13:00～15:00

◆ 地図を楽しもう！

フィールドに出て地図があればもっといろいろなことがわかれば助かるのに、という方にお勧めです。講座では地図に載っている情報を知り、これを活用するためのコツを学びます。地図が少しでも理解でき身近なものになれば、周辺情報宝庫の地図を持つてのフィールド探索は楽しさ倍増です。午前中は地図の読みかたのコツを学び、午後は地図を持つて実地学習をします。

日 時：1月20日（土）10：00～15：30（予定）

場 所：博物館実習実験室・博物館周辺の屋外

講 師：新井田 秀一氏 当館学芸員

対 象：おとなの方(小学高学年以上同伴も可)

定 員：14名(定員を超えた場合は抽選)

参加費：会員 500円(地形図代・資料代・保険料等)

非会員 700円(同)

持ち物：筆記具、色鉛筆、昼食、申し込みはがき、お持ちの方はコンパス(方位磁石)

注意事項：できればマスクの着用をお願いします。午後は屋外に出ますので、歩きやすい服装と防寒への対応をお願いいたします。

締切り：1月6日（土）必着

この講座はWEBフォームによる申し込みができません。本欄後ろの「友の会主催行事の参加申し込みについて」をご覧ください。

問合せ：関口 080 - 6508 - 9840

◆ 「2024年1月 地話懇話会」

演 題：『近年の調査航海報告』

講 師：山下 浩之氏 当館学芸員

日 時：2024年1月24日(水)14：00～15：30

受付は13：40から

場 所：博物館 西側講義室

対 象：友の会会員

申 込：当日受付制（人数制限は設けません）

備 考：マスク着用については、個人の判断にてお願いいたします。

内容紹介（講師より 2023/11/3 記）

2003年から2011年にかけて、フィリピン海南部にて、地球内部を構成する岩石である、かんらん岩や斑れい岩が海底に露出する、メガムリオンと呼ばれる海底地形において、ドレッジ調査や潜航調査などの深海底の調査が実施されました。

その後、フィリピン海には、メガムリオンが複数分布することがわかり、2018年から2023年にかけて、同様の調査が複数の海域で計画され、実施されてきました。

さらに今年の11月には、フィリピン海最南端にある、世界最深部のチャレンジャー海淵周辺にて岩石採集を行う計画でいます。本講演では、これらの調査の概要を紹介します。



しんかい6500と山下浩之氏

◆「第139回サロン・ド・小田原」

演題：『未知の魚を求めて～私の採集遍歴』

講師：瀬能 宏 氏 当館学芸員

日時：2月17日（土）14：00～16：20

受付は13：40から

場所：博物館1階 西側東側講義室

対象：オープン

申込み：当日受付制（人数制限は設けません）

内容紹介

魚の分類や分布の研究の醍醐味は、なんと言っても未知の魚との出会いです。初めて手にする魚、日本からは記録がない魚、まだ和名や学名がない魚等々。誰も手にしたことがない魚を採集できた時の感動はいつまでも心に残ります。本講演では演者の採集遍歴をふり返り、特に印象に残っている魚たちを旅の記録とともに紹介します。



タナゴモドキが生息する牛のぬた場で採集する演者
1978年12月 西表島住吉の湿地にて

◆ 植物観察会「高尾 日影沢の春」

裏高尾、春の植物観察です。午前中は日影沢林道を歩き樹々の芽吹きを楽しみながらフタバアオイ、ヒカゲスミレなど林床の花を観察、午後は路線バスで少し移動した後、小仏川沿いの遊歩道を歩きます。ハナネコノメやコチャルメルソウ、キバナノアマナなど春の高尾を満喫しましょう。

実施日：3月25日（月） 雨天中止

場所：八王子市 裏高尾

集合：JR 高尾駅北口改札 9：00

小仏行バスに乗車、日影で下車

解散：JR 高尾駅 15：00頃

講師：田中 徳久氏 当館館長

対象：オープン（会員限定の企画でしたが会員以外の方も対象に変更しました）

大人20名

参加費：会員500円、非会員700円

申込み：3月5日～11日の間に、件名を「3月25日観察会申込み」とし、本文に氏名、住所、電話、年齢、会員番号（会員の方）、メールアドレスを記入して、下記アドレス宛てのメールで申し込んでください。

shokubutsuG@gmail.com

メールアドレスの無い方は3月9日～11日の19：00～21：00の間に電話で申し込んでください。

電話申込み先：佐々木 080-5686-6762

当日の連絡：佐々木（同上）、田畑 080-5645-7987

*詳細はメール等でお知らせします。



キバナノアマナ

◆「2024年3月地話懇話会」

演 題：『真鶴・湯河原地区採石丁場跡の考察』

講 師：箱根ジオガイド 渡部 孟 氏

日 時：3月27日（水）14：00～15：30

受付は13：40から

場 所：博物館1階 西側東側講義室

対 象：友の会会員

申込み：当日受付制（人数制限は設けません）

内容紹介

江戸城築城の折、真鶴地区の採石は海岸の磯から始まったのですが、磯丁場に残る採石痕や資料等から当時の採石の様子を推論します。

湯河原地区の採石については、小田原市郷土文化館蔵の「石引図屏風」に詳しく画かれています。この採石丁場の特定について、集めた資料に基づいて私見をお話しします。



真鶴三ツ石海岸・番場浦の石丁場跡



石丁場跡に残るポットホール？

友の会主催行事の参加申し込みについて

◆行事案内に申込み方法が指定されていない場合往復はがきに必要事項を記入して、友の会事務局までお送りください。

■必事項：行事名／開催日／参加者全員の氏名・年齢（学年）／会員番号／代表者の住所・電話番号／指定事項

◆行事案内に申込み方法が指定されている場合は指定された方法（メール・電話等）にてお申し込みください。

◆今回より一部の講座でWEBフォームによる申込受付を開始しました。以下のQRコード又はURLよりアクセスして、申込をしてください。

URL：https://forms.gle/vhwLnSYGYXojkWHLA



注意！

■参加費は友の会会員1名分の金額で、内訳は資料代、傷害保険料です。それ以外のは特記事項に記載があります。バスなど予約が必要な場合、参加者個々に材料を購入する場合などの講座参加確定後のキャンセルは、代わりの方をご紹介いただくか、参加費を負担していただく場合があります。

■オープンの行事は会員以外の方も参加できます（参加費が会員とは異なる場合があります）。

■小学生以下の参加は保護者同伴が原則です。

■チラシの発行されない行事もありますので、直接＜連絡先＞へお問い合わせください。

■持ち物など詳細は返信はがきに記載されます

次号は、2024年3月15日発行予定です。

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館友の会
Vol.27、No.3、通巻122号2023.12.15発行

編集：友の会広報部

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

TEL：0465-21-1515 FAX：0465-23-8846

E-mail：kpmtomo@ybb.ne.jp

Blog：http://blog.livedoor.jp/kpmtomo

Twitter：@kpmtomo



ブログ



X (旧 Twitter)